

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業  
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究  
分担研究報告書

**潰瘍性大腸炎癌合併例における臨床病理学的検討**

研究分担者 渡邊 聡明 東京大学腫瘍外科 教授

研究要旨：長期罹患潰瘍性大腸炎における合併症である大腸癌は内科治療の進歩とともにますます重要性を増してきている。潰瘍性大腸炎合併大腸癌のマーカーとして dysplasia を発見することが重要であるが、colitis associated dysplasia と adenoma の鑑別は必ずしも容易でない。欧米のガイドラインでは隆起型の dysplasia で周囲や離れた部位に dysplasia がなく一括で切除できるものは内視鏡的切除の適応であるとされているが、その基となる論文で調査された症例数は必ずしも多くなく高いエビデンスがあるとは言えない。より良いサーベイランスによる dysplasia の発見およびその治療方針を確立するために、多施設の dysplasia/癌の手術症例および内視鏡的切除症例を集積しその特徴を明らかにする。

共同研究者

畑 啓介(東京大学腫瘍外科)  
杉田 昭(横浜市立市民病院炎症性腸疾患センター)  
池内浩基(兵庫医科大学炎症性腸疾患学講座)  
福島浩平(東北大学消化管再建医工学分野)  
安藤 朗(滋賀医科大学消化器内科)  
岡崎和一(関西医科大学内科学第三講座)  
緒方晴彦(慶應義塾大学内視鏡センター)  
金井隆典(慶應義塾大学消化器内科)  
仲瀬裕志(京都大学内視鏡部)  
中野 雅(北里大学北里研究所病院内視鏡センター)  
長堀正和(東京医科歯科大学消化器内科)  
中村志郎(兵庫医科大学炎症性腸疾患学講座)  
西脇祐司(東邦大学社会医学講座衛生学分野)  
穂苅量太(防衛医科大学校消化器内科)  
松井敏幸(福岡大学筑紫病院消化器内科)  
松本主之(岩手医科大学消化器内科消化管分野)  
鈴木康夫(東邦大学医療センター佐倉病院内科学講座)

ーベイランスが推奨されており、dysplasia が発見された際にはその形態や grade により大腸全摘が勧められている。一方で dysplasia が炎症範囲外に出現した場合や dysplasia が炎症範囲内であっても限局しており腺腫様の形態を示す場合には、大腸全摘ではなく内視鏡的切除を行い慎重に経過観察を行う方法も推奨されている。しかしながら、実臨床においては colitis associated dysplasia か adenoma かの鑑別は必ずしも容易ではなく、また内視鏡切除後の症例の長期経過を調べた報告は多くない。また、潰瘍性大腸炎合併大腸癌で大腸全摘をした症例では dysplasia の近傍のみならず離れたところにも癌が発見されたり、多発したりすることが多いことが特徴とされている。単施設の症例数は限られるため、多施設の症例を集積しどのような症例が内視鏡切除可能でどのような症例が手術を要するかを調べるということが重要である。

そこで、本研究では dysplasia・癌で手術を行った症例および内視鏡切除をした症例に関して多施設の症例を集積してその特徴を調べることにより、よりよいサーベイランスの方法および dysplasia・癌症例の治療方針を検討することを

A. 研究目的

長期罹患潰瘍性大腸炎では合併症として大腸癌が知られており、大腸内視鏡によるサーベイランスが重要である。Dysplasia をマーカーとしたサ

目的とする。

## B. 研究方法

各施設に調査票を送付し連結可能匿名化した形で潰瘍性大腸炎合併大腸癌およびその前癌病変である dysplasia 症例の臨床病理学的特徴を調査する。特に内視鏡的切除症例および手術症例データを多施設より後方視的に集積し解析を行う。

(倫理面への配慮)

多施設共同レトロスペクティブ研究であり、東京大学の倫理委員会にて承認を得る。

## C. 研究結果

外科プロジェクトミーティングにて外科手術例の調査票に関して 下記の項目が決定された。

(1) 試験方法: レトロスペクティブに医師が記入する調査票によりデータを集積し解析を行う。個人情報各施設において連結可能匿名化する。

(2) 対象: 潰瘍性大腸炎合併大腸癌および dysplasia 症例。

(3) 評価項目: 性別、手術時年齢、手術時潰瘍性大腸炎罹患期間、原発性硬化性胆管炎の有無、大腸癌家族歴の有無、リッチ症候群の有無、手術時の潰瘍性大腸炎罹患範囲、癌発見動機、手術術式、異時性癌の有無、病理標本全割の有無、sm 以深癌の個数、sm 以深癌に併発する high grade dysplasia の有無、sm 以深癌併発する low grade dysplasia の有無、術前に指摘されていなかった sm 以深癌の有無、潰瘍性大腸炎罹患範囲外の癌、狭窄の有無、炎症性ポリープの有無、Neoplasia の範囲、TNM 分類、病理組織型、予後(生存、再発)

また、内科を中心として今後 sporadic adenoma を含めた dysplasia の内視鏡切除例の症例調査を行う予定である。

## D. 考察

潰瘍性大腸炎に対する癌サーベイランス法の確立とその治療方針決定のために、多施設の癌・dysplasia 症例を集積し解析することが重要であ

る。

## E. 結論

よりよい潰瘍性大腸炎に対する癌サーベイランス法の確立とその治療方針決定のために多施設共同レトロスペクティブ研究を計画した。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

Hata K, Kazama S, Nozawa H, Kawai K, Kiyomatsu T, Tanaka J, Tanaka T, Nishikawa T, Yamaguchi H, Ishihara S, Sunami E, Kitayama J, Watanabe T Laparoscopic surgery for ulcerative colitis: a review of the literature. Surg Today Epub ahead 2014

飯田 祐基, 風間 伸介, 石原 聡一郎, 須並 英二, 渡邊 聡明 炎症性腸疾患 (IBD) 癌化とサーベイランス 成人病と生活習慣病 44 (3) 299-304 2014

### 2. 学会発表

Anzai H, Kazama S, Kiyomatsu T, Nishikawa T, Tanaka T, Tanaka J, Hata K, Kawai K, Yamaguchi H, Nozawa H, Kanazawa T, Ishihara S, Sunami E, Watanabe T Effectiveness of 34-year surveillance colonoscopy program for long-standing ulcerative colitis in a single institution 2014 Advances in Inflammatory Bowel Diseases, Crohn's & Colitis Foundation's Clinical & Research Conference Orlando, Florida December 4-6, 2014

Ishii H, Hata K, Kazama S, Shuno Y, Kawai K, Ishihara S, Sunami E, Watanabe T Long-term functional outcomes and quality of life in patients with ulcerative colitis who underwent hand-sewn or stapled ileal pouch-anal anastomosis The 2nd Annual

Meeting of Asian Organization for Crohn's &  
Colitis Seoul June 19-21, 2014

岸川純子, 風間伸介, 仁禮貴子, 小沢毅士, 石  
原聡一郎, 須並英二, 北山丈二, **渡邊聡明** 薬物  
療法の進歩に応じた炎症性腸疾患の外科治療  
当科における潰瘍性大腸炎サーベイランス症  
例についての検討 第114回日本外科学会定  
期学術集会 京都 2014年4月5日

畑 啓介, 風間伸介, 岸川純子, 安西紘幸  
小澤毅士, 石原聡一郎, 須並英二, **渡邊聡明**  
潰瘍性大腸炎併発大腸癌の検討およびその早  
期発見法 第25回日本消化器癌発生学会総会  
博多 2014年11月13日

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

##### 1. 特許取得

渡邊聡明「潰瘍性大腸炎患者の癌化リスク  
を決定する方法」特願 2009-092033

##### 2. 実用新案登録

なし

##### 3. その他

なし